

「子どもたちに夢を」伝える サイエンスマンでありたい」(前編)

2006年1月、アフリカ南部マラウイで、あるテレビ番組がスタートした。タイトルは「サイエンスマン」。飛行機はどうして飛ぶの?」といった疑問や科学の原理を分かりやすく説明したり、科学を活用して便利な機器を作ってみたり、回国では新しいタイプの楽しい教育番組に、子どもから大人まで多くの視聴者が夢中になっている。「サイエンスマン」の正体は、青年海外協力隊の長谷宏司さん。彼はなぜ「サイエンスマン」になったのか。子どもたちに夢を与え、自身も夢を追い続ける彼の人生を2号にわたり紹介する。



挑戦者たち
Stories of
Challengers
Vol.20 (前編)

科学の面白さを 伝えたい

「ようこそ『サイエンスマン』へ!今日のプログラムは降雨検知器」
マラウイ国営テレビ(TVM)の薄暗いスタジオに、ひととき元気な声がこだまする。今、マラウイで大人気の番組「サイエンスマン」の収録が始まった。「サイエンスマン」を演じるのは青年海外協力隊シニア隊員¹の長谷宏司さん。共演の子どもたちも手に手伝わって、雨

が降るとアラームが鳴り出す装置を、身近な材料で作っていく。彼の巧みな話術と手つきに、子どもだけでなく、収録を見守る大人たちも引き込まれていく。

「これを使えば雨に気付かず洗濯物を濡らしてしまうことはもうないね。こんなふうに科学のアイデアはとても役立つんだよ。みんな、分かったかい?それじゃまた来週、サイエンス!」番組は15分間。リハーサルなしで始まった本番は、途中で止まることもなく一発OK。「いつもこんなふうにまくいくわけじゃないですよ。手早く後片付けする長谷さんが照れないから言つ」

再放送も含め週3回放映されている「サイエンスマン」の企画はすべて長谷さんが考える。台本は彼の頭の中。TVMに配属されている癸生川裕隊員のサポートのもと、マラウイ人スタッフが撮影・編集する。収録はスタジオで行うこともあれば、外に出て市民の協力を得て

行うこともある。

『サイエンスマン』は日本人が演じているがマラウイ人の番組。一般市民の支持のおかげで続けてこられた

「サイエンスマン」は、街中どこへ行っても声を掛けられる。「サイエンスマン!先週のプログラム、面白かったよ」「うちの子がいつも楽しみにしているんだ」といった具合に。「人々の反応を肌で感じられるから、もつといいものを作ろうと思える。身近にある材料を使って楽しめる実験や生活に役立つものを紹介するようにしている」ので、子どもだけでなく大人の反響も大きい。子どもたちに科学の面白さを伝えたい思いで始めましたが、十分に教育を受けられずに育った大人にも効果があることを実感しています」

子どもに夢を与える 大人が必要

長谷さんがマラウイに赴任したのは2005年6月。もちろんサイエンスマンになるためではない。回国南部、ドマシの中等学校(日本の高校に当たる)

で物理教員として活動しながら、ほかの理科教師隊員とともに

JICAの「中等理科現職教員再訓練プロジェクト」²と連携して、教員研修を支援している。また、生徒が科学を楽しみながら創意工夫を競い合う「科学競技大会」も企画・運営する。この大会の様子はTVMが放送したところ、全国から再放送を求める声が局に殺到した。これを機にTVMのプロデューサーが新しい教育番組の共同制作を長谷さんに持ちかけ、「サイエンスマン」の誕生につながった。視聴覚教材作りに携わる新田秀幸隊員の協力で制作された第1話は「飛行機はどうして飛ぶの?」。少年に質問されたサイエンスマンが実際に飛行場に行つて調べてくるという設定だ。

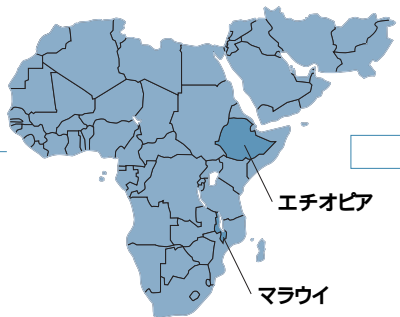
「マラウイを含め途上国では、先生が一方的に生徒に知識を詰め込む教育が多いのですが、それでは子どもの獨創性や考える力が養われません。素朴な疑問を黙殺せず、科学に対する探究心や創意工夫を促すきっかけを大人が与えることが重要です」そんな長谷さんの思いを理解するマラウイ人も現れている。ある日、街で話し掛けてきた男

¹ 技術協力プロジェクトと連携して、連絡・調整・折衝などを行いながら複数の協力隊員の活動を統括、サポートする役割を担う。2005年に「フィールド調整員」の新設に伴い、廃止された。
² モデル地域の現職理科教員に質の高い研修を提供できるようにし、中等理科教育の質の向上を支援する技術協力プロジェクト。実施期間は2004～07年10月。

Hase Koji

長谷 宏司

青年海外協力隊





降雨検知器の収録に必要な材料を買いに来たスーパーで、店員から「サイエンスマン、いつも見てるわ」と声を掛けられる。どこへ行っても人気者だ。長谷さんも「今週の内容、どうだった？」と常に人々に感想を聞く

また、長谷さんは国営ラジオ局からもオファーを受け、06年7月に新番組「サイエンスアドベンチャー」が始まった。ラジオは実験を見せることはできないので、リスナーの質問にサイエンスマンが答えるという設定だ。「最初はラジオのやり方が分からなくて、惨憺たる結果でした（笑）。ラジオは耳で見るので台本を大事にしています」。

挫折、帰郷、再び夢に向かつて

大阪で生まれ育った長谷さんは、無線技師の父親の影響もあって、子どものころから電磁石を作って遊んだり、天体望遠鏡で月面を観察したり、科学に強い関心を寄せていた。

「ある日、天文雑誌を見ていて、惑星の写真を顕微鏡で見たらもっとよく見えるはずだと気付いて、やってみたら点々しか見えない。そりゃそうですよ（笑）。でもそういう好奇心や探究心は子どものときに芽生えるものだと思っし、親もはぐくんできました」

中学校では特に目標もなく勉強もできなかったが、テレビで旅客機のパイロットの姿を見てたちまち魅了された。「カッコいい！これになりたい！って。単純ですよ（笑）。すぐにパイロットになる方法を調べ、そしたら

「いくら僕が一生懸命やっても、周りの理解・協力が得られなければ意味がない。僕は火鉢の中の種火。一人で熱く燃え尽きるのではなく、炭に息を吹きかけて火を移すように根気よく働き掛けていくことが大切です。でも、無駄足覚悟で、10やっつて2ぐらいいれば満足と思わないと続けられないかもしれない



第37話「バクテリア」の撮影の準備をする長谷さんたち。TVMでAV機器の指導をしている隊員の癸生川さんがカメラマンをサポートする。スタジオの外で収録するときは、街の人や長谷さんの運転手、ムボンダさん(左)が出演すること

る時間が少なく、パイロットの登竜門である航空大学に合格するほどの学力には達していませんでした」

航空大学を受験できるのは当時21歳まで。卒業後、上京して浪人生活を送り、試験に挑戦し続けたが、その壁は越えられなかった。

「自分なりに頑張ったのですが、3度目の最後の試験に落ちて、愕然としました。道が開ざされてしまった。それ以外に目標がなかったの、どうしようかと悶々としていたとき、青年海外協力隊のポスターを見て、なぜかとても惹かれました」

長谷さんは早速、協力隊の事務局に赴き、ある看護師隊員の報告書を読んで衝撃を受ける。

「それには、私はここに来るまで、人の命は地球より重いと思っていたが、石ころより軽いのではないかとありました。薬やワクチンがなくて人があまりに簡単に死んでいくのを目の当たりにした隊員の言葉です。ショックでした。ここには医者が

いないのか、だったら自分が行くしかない！と本気で思っつて。若かったんですね（笑）」

21歳。すでに3浪している。経済的にも厳しい。そこで住み込みの新聞奨学生になって予備校に通い始めた。だが、新しい目標に向かって歩き始めた彼を不運が襲う。毎日、自転車を降り降りして新聞を配るうち、腰を痛めてしまった。それでも続けていたが、医師から「このままでは歩けなくなる」と止められ、泣く泣く断念した彼は逃げように東京を去る。大阪の実家で養生しながら焦りは募るばかりだった。そんなとき、求人雑誌で塾講師の募集を見つけ、子どもに教えることに興味があった彼は応募してみた。模擬授業をやることになり、それが塾長の目に留まり、正社員として採用される。「高卒の学歴で中学生の塾で教えるなんて例外的

運が良かったのしょう」。

ようやくつかんだチャンスだし、高卒だとばかにされたくない。長谷さんは子どもたちに

分かっていてもなかなかそうできないものだが、長谷さんがその境地に至るまでに、数々の挫折や絶望に直面し、乗り越えてきた経験があった。

大阪で生まれ育った長谷さんは、無線技師の父親の影響もあって、子どものころから電磁石を作って遊んだり、天体望遠鏡で月面を観察したり、科学に強い関心を寄せていた。

「ある日、天文雑誌を見ていて、惑星の写真を顕微鏡で見たらもっとよく見えるはずだと気付いて、やってみたら点々しか見えない。そりゃそうですよ（笑）。でもそういう好奇心や探究心は子どものときに芽生えるものだと思っし、親もはぐくんできました」

分かりやすく教えようと試行錯誤を重ねた。科目は理科、数学、英語。いろいろ失敗を繰り返しながら、面白くて分かりやすい授業のコツを身に付けていった。

働き始めて1年、もう少し大きな塾でやってみたいと生徒数3000人ほどの塾で教えた後、専門学校の講師に転職した。

「専門学校の学生は年齢的にも近かったし、大学に行けなかったとコンプレックスを持つ子もいて、そんな気持ちもよく分かっていたので、彼らの目線と一緒に頑張ろうという姿勢でいました。君たちは素晴らしい才能を持っているのだから、頑張れば大卒にだって負けないよ」とメッセージを送り続けていたんです。

この仕事の面白いところは、人間が変わる瞬間に立ち会えること。それまでフラフラしていた学生が、深夜に突然電話をかけてきて「先生、オレ就職するで！」と宣言したり。僕らが伝え続けたことが何か影響を及ぼしている、だからうれしくて報告してくれるんだと思っんです。

そんな経験がいくつもあって、心底、教育って面白いと思っしましたね」

しかし、そのころ20代後半に差し掛かっていた。医者も協力隊もあきらめたわけではない。この仕事も好きだが、自分には目標がある。彼は講師を辞め、再び受験勉強に集中した。医学部にすぐに受かる学力ではないと判断した彼は、その次に興味があった自然科学の専攻を受験し、国立大学に見事合格。30歳になっていた。

そして4年生の秋に協力隊に応募し、卒業後、晴れて理科教師隊員となってエチオピアに赴任する。「新卒にしては年をとっていましたが、誰よりもはつらつとしていたと思いますよ（笑）。ようやくやりたかったことができるって」。

面接試験で行きたい国を聞かれ、「どこでもいいですが、厳しいところにしてください」と答えた長谷さん。エチオピアはその希望通りの国だった。

(6月号に続く)

「教育の仕事の醍醐味は、人間が変わる瞬間に立ち会えること」



隊員と協力して企画・運営している「科学競技大会」で、提携を結んだマラウイ航空が、優勝チームの生徒たちに空港見学の機会を提供し、旅客機の操縦席にも座らせてくれた。「科学の実際に触れ将来の職業選択の機会という夢を、マラウイの大人がマラウイの子どもたちに与えることができたと思う。こうした試みを試みのまま終わらせてはならない」

Hase Koji

はせ・こうじ 青年海外協力隊シニア隊員(プログラムオフィサー)。1965年大阪府出身。塾講師、専門学校講師、自動車会社、病院勤務などを経て、96年に高知大学理学部へ入学。2000年に卒業後、青年海外協力隊に参加し、エチオピアへ赴任(理科教師)。02年に帰国後、公立中学校教員、商社ケニア駐在員などを経て、03年に青年海外協力隊シニア隊員(理数科教師)としてフィリピンへ。05年から現職。